太宰管内志

肥前之七

杵島郡　藤津郡

彼杵郡上

和書門
類
二九六〇一
號
二〇二
函
八
架
二
冊

内閣文庫
和書
類
二九六〇一
號
八二
冊
七
函
七二
架

内閣文庫

番號	和	29601
冊數	82 (	7)
函號	176	44

国立公文書館
National Archives of Japan

太宰管内志

肥前之七　　　筑前人伊藤常足編録

○杵島郡

延喜式に肥前國杵島郡あり和名抄に肥前國杵島岐志万とあり名義は風土記に昔は纒向日代宮御宇天皇巡幸之時御船泊此郡磐田杵之村于時従船牂戒之穴治水自出一云船泊之家自成一島天皇御覧語群臣等曰此郡可謂牂歌島郡今謂杵島郡訛之也とあり　牂戒まては牂歌とあるは牂柯の誤なるべし前漢書地理志に牂柯繋船杙とあり又万葉集和名抄などにもえしあり今の謂ましき舟をつなぐ竹をカシダケと云是なり此郡周賀郷件は鱸細之牂戒化而為礒ともありそこうしいさいりそのをべし　さて舊事紀今本五

明治十三年献本

巻に城島ノ連ノ祖草名草姫（城島ノ連と云姓ハ此外物に見えたる事なし）三代實録十八巻に貞観十二年六月十三日先レ是太宰府言肥前國杵島郡兵庫震動鼓鳴二声決ニ之蓍亀一可レ警ニ隣兵一などあり。さて郡の大様ハ風土記に杵島郡郷肆所（里一十三）驛壹所。和名抄九巻に杵島郡。多駄。杵島。（木之万）能伊。島見。（志万美）寛知集に杵島郡百十四村云云。元禄圖に杵島郡百十四村。高六万七千四百三十六石三斗六升一合など見えたり。又方位等の事ハ地圖を按ずるに東方小城郡又海にとなる。南方ハ海又藤津郡にとなり西ノ方ハ彼杵松浦の二郡にとなり北ハ松浦小城ノ二郡にとなりて東西　里南北　里にいたる（當郡須古荘法泉寺ノ僧元禄三年一切経を買んと企たるに或夜の夢に同郡白石荘何某ノ馬来て其料を資む事を乞馬主是を聞て馬を寺にとのせし由嵯峨月潭和尚ノ栽艸稿に見えたり法泉寺ハ古き寺なりとや）

◯久治國神

三代實録四巻に貞観二年二月八日肥前國云云授ニ従五位下久治國神従五位上一とあり。久治ハ倶治とよむべし（今もクヂと唱ふる由也）元禄圖に杵島郡白石南郷久治村あり（此處に在ス神なるべし）

◯杵島山

景行天皇紀に十八年七月云云到ニ筑紫後國御木一居ニ於高田行宮一時僵樹長五百七十丈焉百寮蹈ニ其樹一而往来云云爰天皇問之曰是何樹也有ニ一老夫一曰是樹者歴木也嘗未レ僵之先

當朝日暉則隱杵島山當夕日暉覆阿蘇山也。又風土記 万葉仙覚
抄に杵島郡縣南二里有一孤山従坤指艮三峯相連。是名曰
杵島坤者曰比古神中者曰比賣神艮者曰御子神 一名軍神動則兵興
矣 鄕閭士女提酒抱琴毎歳春秋携手登望樂飲歌舞曲盡而
歸歌詞云
阿羅礼符縷耆資麼加多愷塢嵯峩紫弥台區縒刀理我
泥氏伊毋我堤隝刀縷 是杵島曲
とあり 万葉集三巻に霰零吉志美我高嶺乎險跡草取可奈和妹手乎取。右一首或云吉野人味稲与柘枝仙媛哥
也但見柘枝傳無有此歌とあるも此風土記のうたをとり なりへいかへぬるものときこゆ。なほよくうかゞふべし 師
云筑後御木の西海に出て東西を顧て兩國の形勢を考ふ
るに東方遥に阿蘇山聳え西方海を隔て多良岳に向へて
杵島山と云へるハ何もなけれど阿蘇にならぶばかりの山と
ても多良山の外に有事なし風土記にも高山の由見えた
れどさばかり打見るまではさばかりの高嶺もえしらねど
是ハ風土記に多良之峯とあるばかりや叶ひぬべき此峯ハ
海中にさし出て直に御木に向ひゐる高山なれバまがふ
べきもあらぬ地勢なりされども同書に肥後の荒爪山
と云るをも又何もなけれど彼國の山々を見放ともそれぞ
と思ふばかりの山と阿蘇山の外にハなし杵島荒爪山何も
もさる人なし 春岑云キシマ山ハ松浦郡キシ岳を云るも あらぬを考ふべし。多良之峯又荒爪山の事

国立公文書館
National Archives of Japan

風土記に見えたる説は藤津郡多良峯の件に引出たるをかむがふべし

○嬢子山（ヲミナヤマ）

風土記に杵島郡嬢子山在郡東西纏向日代宮御宇天皇行幸之時土蜘蛛八十女又有此山頭常捍皇命不肯降服於茲遣兵掩滅因曰嬢子山とありて嬢子は袁美奈とよむか。村名帳に小城郡多久郷女山村ありて是後世郡界のかはりたる物と聞ゆ。圖に小城郡西に女山村倉持村ありて杵島郡に甚近し。肥陽古跡記に多久ノ女山は鈴鹿御前の旲也則山の姿女の髪ゆひてかぶりたる形に似たり山上に岩屋ありて遠見られども口訪るの如くにしてやさしき山形なりぬるとよめつらし此岩又迎のをさかにつゝき石と云ありて是は鈴鹿御前の宝を入給ひし袋の石になりたる也と云此山の西に大山あり船嶽八幡嶽と云神功皇后異國退治の時の陣所也と云。肥前國人云天山ノ西三里許に男山女山とて有リ天山よりは遥に低し佐嘉より唐津に行く人天山を東に見。男山女山を西に見て通るなり女山は男山の西に並歴り両山共に石山にて古木などの立ル處にはあらじと云てき

○蒲川山（カマガハ）

風土記佐嘉郡ノ條に昔者樟樹一株生於此村幹枝秀高茎葉繁茂

朝日之影𣑥ニ杵島郡蒲川山ニとあり。蒲川は加茂加波とよむ
べし 蒲は加万とよむ字なれど加万加波なるべけれとも思ひなれど吾邦俗蒲をガモとも唱へまし、蒲原を加
無波良と唱ふる事和名抄六巻にもみえしなれどおそらく唱への似つかはしきにあらがひつ 名義は蒲
の多く生なる處なるをもて負せしるべし。さて此山今いづ
きなりしも詳ならずして志ひて按ずるに元禄圖に杵島郡西山
村上山口村山口村などをとこのあたりの山などにえあ
らぬり地理をさしざれを定めがたし 又提河村桃河村又河上村河良村立野
河内村なども あり是も蒲河によしある事にはあらぬかならむといふべし

○磐田杵村

風土記杵島郡ノ件に昔者纏向日代宮御宇天皇巡幸之時御船泊ニ

此郡磐田杵之村ト云とあり盤は磐の誤にて伊波多支乃
牟良とよむすやされども元禄圖を考ふるに此郡さる名
の地もきこえずおひていかで上滝村ありそしこのあたり
なる岩滝なとおふ地はなほ地理をさしされど定めが
たし又思ふに海辺と聞えたれど田城の意にてもあらむ
り

○多駄郷

和名抄に杵島郡多駄あり。多駄は太陀とよむ屋し 佐渡國羽茂郡
駄又出雲国秋鹿郡多太などもあり 名義はまだ考へねど。元禄圖に杵島郡白
石六角郷多田村あり 和漢三才図會に肥前国大智院在黒髪山ニ寺領三百石。寺ハ在ニ五十町山ノ上ニ在ニ

大磐名巓頭岩大サ五丈余徃昔有大蛇纏此岩七匝毎嘐棲蛇
池于今有之鎮西八郎為朝射殺之而已来人安堵云云とあり
さて元禄図を按ずるに杵島郡下黒髪村ありとし此多駄
のあまりなどにいあらぬゝ今思ひいづるましみうきつ
く

○福泉寺

肥陽古跡記下巻に杵島郡和泉山飯盛福泉寺本尊薬師如
来而初真言宗之山也其後密法断絶而聖一國師弟子鉄牛
和尚中興之為禅窟云云　昔此寺に猪一ッ来て常に佛ノ茶湯を捨るを飲けり後ハ人に馴て猪よ
と云て茶湯を捨ざもやがてかぶ来りてのミなどしけり
或時佛殿の後に赤子のなく声そ衆徒不思儀の思ひをな
し此聲を尋て至り見るに彼猪人を生て乳を呑ませて居
たそ衆徒等肝を消して是必此山の法師など誤て畜生道
に隨けるなしんと云て先是を顕さんとて各彼堂に集
まりつゝ僉議まちくなる中に或僧火石を取て廻んと云
已に其場に臨む其暁に藤津郡塩田庄大黒丸と云夫婦に
同夢の告あり則老僧顕きて云汝年来子を祈きて今汝ゲ
子福泉寺の堂の後にあり行てうるべしと云と見て夢醒
ぬ彼夫婦此寺に来りてうるに衆徒等火石を取むとし
大黒丸夢の子細を語りて彼女子を所望しけて衆徒等争
ひを止えて彼子を大黒丸に与ふ是を和泉式部と名付く
九歳の時都に登りて宮仕へして終に帰らぞ里人の語傳
に彼式部錦浦を思ひ出て都より哥をうそて送きり其哥
に古郷に帰るく衣の色くちく錦のうらや
きしまなるらん云云とそしめり

○黒髪権現 杵島郡

肥陽古跡記下巻に黒髪山大権現本地薬師如来之三尊者
聖德太子之御作也昔天竺大王飛来吾朝坐天堂岩下向虚
空下御櫛給刹那現法躰姿云云收其髪為御宝殿故号黒
髪山岩峨々聳雲間谷深々等金輪云云名之云西光峯寺定

女人隔界之霊場賜過六十歳者無其戒云云昔有大蛇巻天堂岩時々害人家已欲破神殿鎮西八郎為朝居武雄庄聞此事至天堂岩射此蛇大蛇忽墜谷叫音如雷云云此山下有宮野處其處有盲目云梅野座頭乞得為朝之短刀帯之下谷底刺殺彼虵依此縁梅座盲目至今帯短刀云云大虵所落云白川古哥云筑紫ナル黒髪山ノ白川ハ水ノ鏡ナシテホシケン。又於御門岩側有穴於此内毎年鷲来育子又其谷有穴号龍門岩屋廣一間四方而右石廊入之三間其奥有石門扉云云

○能伊郷

和名抄に杵島郡能伊あり。能伊ハ乃意とよむべし。名義ハまづ考へんに。重て按ずるに能伊ハ野寐の意にても有むか。さて元禄圖を考ふるに能伊と云名なし大野村中野村永野村など云ハありそし此内にてもあるかなからん考ふべし

○島見郷

和名抄に杵島郡島見あり。島見ハ志麻美とよむべし。名義ハ國見などの例にて高處にして島々の見ゆる處なるべし。さて元禄圖に杵島郡島見なしちひていちど花島村永島村津村糀島村などそし此内にてもあらむか 序にいふ元禄図に

此郡橋下郷大渡村あり是そし河のある處にて大渡川に
もあらぬり貫之の哥につくしなる大わたり河とあるを
筑前なりとするは説ち早くひがことなること筑前志にも
きまへたるが如しさて肥後國飽田郡にも大渡河ありて
その處にも引出ぬれどぬしりあ
うしとりふいいまじえあらじ

○武雄大明神 杵島郡

肥陽古跡記下巻に武雄大明神者武内大臣是也云云曰武
雄里又有唐船嶽云云山上行基菩薩御作之石佛羅漢五百躰
有之於頂上者天狗常住之由称之人倫常不通

○圓應禪寺

同書下巻に武雄円應禅寺本尊聖觀音之座像而聖徳太子
御作之霊像也云云此寺後山上有辨財天池其中島有古佛
千躰地藏弘法之御作也とあり

○常在寺

同書に塩田教王山常在寺者依後鳥羽院之勅願御建立之
霊場也當寺七世住職成紹法師候仁和寺之御室奉祈後鳥
羽院之御悩快御云云拜受天皇秘給大黒尊像安置此寺云
云此寺法印怪大黒流塩田川其後有告其里人又帰彼寺云
云後山有丹生大明神社又熊野有八幡社平氏三位中将維
盛卿之廟也平家没落之後隠居此處云祭之為神至今営祭
例神事又西方高山有毛美嶽観音行基菩薩之造立也又九山
有大日堂是亦行基菩薩之作也 又云此里に大黒丸とて舘あり是は和泉式部の父母のそ

めてし旧跡なり則式部、石塔あり今もまれにうりの百姓ども短冊などをつけてさゐくの祭をなすそ又式部が名付けたる処として松の一村ある内に阿弥陀堂の形ばかり残れるあり其西に観音を安置る是を笠着堂と云和泉式部上洛の時里人ども送り来たりていとまうしして餞かてらて笠をきせたりしよりかく名付けりと云又未申の間に當て都の富士に似たる山あり天狗嶽と云て常に天狗のすむ処なりと云云

○藏王權現

同書に木庭、吉野、御嶽者藏王權現鎮座而本地觀世音菩薩也依称徳天皇之勅願有御建立毎年二月十五日夜於御宝殿有御田祭御神殿、南北有庭櫻名木也とあり称徳天皇とあるいめづらし古文書類の事いいまじ考へだ此天皇の御代の前後佛法を深く信じたまひて諸国に伽藍を建給ふ事多くあれとし観音を建たまへるを其鎮守の神として後に祭れるに

とあらぬはやなるべしうし考ふべし

○藤津郡

延喜式に肥前國藤津郡あり。和名抄に肥前國藤津、布知豆とあり。名義は風土記に昔者日本武尊巡狩之時到此津日没西山御船泊之明旦遊覧繋船覧於大藤因曰藤津とありさて國造本紀に葛津立國造志賀高穴穂朝御世紀直同祖大名弟彦命児若彦命定賜國造葛津の字は衍文ときこゆ。さて葛津はフヂツとよむべし。和名抄に播磨國明石郡葛江布知衣などもあり若彦は風土記に稺日子とあり委くは能美郷件にあげつらふべし。式に能登國羽咋郡藤津比古神社といふもあり三代實録十三巻に貞観八年七月十五日太宰府馳駅奏言。肥前國基肆郡人川辺豊稲吉同

郡擬大領山春永語豊稲云与新羅人珍賓長共渡入新羅國教造兵弩器械之術還来将撃對馬島藤津郡大領葛津貞津高来郡擬大領大刀主彼杵郡人永岡藤津等是同謀者也仍副射手四十五人名簿進之。宇佐宮大鏡ニ宇佐宮御領肥前國藤津郡来垣二箇所（有方角四至之書略之）彼両所為遼遠之間依不叶神事以天喜二年八月廿五日相轉之状云件藤津雖為宮領依為遠國用途之間不使宮用自以窂籠仍尋便宜以近郡日田郡散位大藏朝臣永明進府来限永年相轉申既畢者など見えあり（来垣ハ地名かさらぬも今ハ地名の落あるなるべしと一只ニ来を生立ある處をいふか進府来なとあれど只ニ来の事まてもあるべし）鎮西要略二巻ニ承徳元年異賊船百餘艘来於松浦澳及筑前海上充満丁枝船調軍器将攻上九國之士太宰府官兵九州之軍士大口折而撃破賊船賊徒數万没溺海水肥前國藤津郡之郡吏伊佐平次兼元殊播戰功賜禄封大庄四ヶ所且令兼元列官矣（将門之末）武鑑ニ鍋島氏（柳間朝散大夫）二万石。在所肥前藤津郡鹿島。江戸より海陸三百四十七里余。但大坂より久島まで海上二百十四里。さて郡ノ大様ハ風土記ニ藤津郡郷肆所（里九）驛壹所烽壹所。和名抄九巻ニ藤津郡塩田。能美。（風土記ニ郷四所とある内の二所早く和名抄の比ニ亡びうるか又ハ後世の和名抄ニうつしおとせるよりとまぎるるにてもあるべし）寛知集ニ藤津郡七十九村云云。元禄圖ニ藤津郡七十九村。高三万七百五十石八升四合など

見えたりかくて方位の事ハ東ハ海を隔て筑後國御木山門ノ二郡にしるて南ハ高木郡に隣て西ハ彼杵郡にしるり北ハ杵島郡にことなり東西□里許南北□里餘にして北に山多く南に平地多し郡中に宮道ノ筋有て往来の使よろしく人民山海の使を得て豊饒なり

栁園随筆に肥前国諫早より七里行て藤津郡竹嵜に至ル。此より多良山高ク聳ヘ南に島原ノ温泉有て絶景なり竹崎山観世音寺あり真言宗にして本尊ハ行基ノ開基なりと云國中第五番ノ観音の由なり此浦漁家数軒あり是多良山ノ東隅の出埼なり此埼を出きて北ノ方海開けて廣し東に肥後の島山遠ク見ゆ玉名郡長洲ノ山黒く指出たり夫より遥東に阿蘇山見ゆ東北ハ筑後国黒崎栁川ノ城楼も遥に見ゆ北に佐嘉ノ方山々を越て筑前国竃門山肥前ノ基肄山九千部山西に脊振山鬼ケ鼻金山等等雲に連て見え渡て西ハ肥前の山々重なりて多良ノ峯につゞけり

◎丹生神

三代實録五巻に貞観三年八月廿四日肥前國正六位上丹生神従五位下とあり。丹生ハ尓布と訓むべし。名義いまだ考へねど和名鈔に筑前国上座郡壬生(尓布とよめり)。千栗宮ノ社記に養父郡司壬生春成と云人みえしありしある事にもあるをぬるやかくて元禄圖に藤津郡嬉野郷丹生川村あり此處にまれ神なる處なら暫く此處に挙て後の考へをまつるなし

○能美郷

和名抄に藤津郡能美あり。能美ハ乃未とよむべし。名義ハ

風土記に藤津郡能美郷(在郡東)昔者纏向日代宮御宇天皇行幸

之時此里有土蜘蛛三人（兄名大白次名中白弟名小白）此人等造堡隠居不肯降服尓時遣陪従紀直等祖穉日子今以誅滅於茲大白等三人但叩頭陳己罪科共乞更奉主人因曰斛美郷とあり（穉日子ハ若彦にて後に藤津國造となれて國造本紀の説上にひけるがごとし）斛美今ハ詳ならねど強て按ずるに元禄圖に藤津郡鮎古美郷あり是かなるによく考ふべし（同國塩田郷に美野村と云あれどそれにてあらじ・又思ふに元禄図に藤津郡岩屋河内と云村あり是としからの三人の土蜘蛛のかくれ居たりし處にもあらぬかよく考ふべし）

○託羅郷

風土記に藤津郡託羅郷（在郡東臨海）同天皇（景行天皇をいふ）行幸之時到此郷御覧海物多勅曰地勢雖小食物豊足可謂豊足村今謂託羅郷訛之也とあり（託は多の一音にかりたるなり）元禄圖に藤津郡諫早郷南多良北多良二村あり海邊なり此二村の内に小流あり・大日本道中細見記を按ずるに藤津郡海辺に多良駅あり是より南諫早に六里（其間に湯江駅あり）北塩田に五里東北竹崎に三里あり又日本輿地圖九州圖等を以考ふれば竹崎は多良の南にあり（柳園随筆に今も藤津郡多良駅あり多良山の東にして海に臨めり此駅路は佐嘉西成瀬より鹿島鍋島等を経て此駅に至り多良山の東南の尾を越て高木郡永昌駅に出る是を託羅越といふ常足云決吾授手印疑問鈔下巻に肥後国竹崎尼公とあるは肥前の誤にて此竹崎のことにはあらぬかなからくむうかゞし・重ねて按ずるに竹崎尼公は肥後に決せり此事は削去るべし）

○多良峯

筑後風土記三毛郡條ニ昔者楝木一株生於郡家南其高九百七十丈朝日之影蔽肥前國藤津郡多良之峯暮日之影蔽肥後國山鹿郡荒爪之山云云因曰御木國後人訛曰三毛今以為郡名 此説釈紀十巻ニ引出せり 肥前風土記塩田川ノ件ニ此川之源出郡西南託羅之峯東流入海。圖ニ藤津郡釜伏山経岳タラ岳と三山北より南にならべて皆郡西によりて彼杵郡の界なりそのぎの方にも釜伏又経島ツヽラノヲ山あり此辺山多くして村落なし多良村といい東西数里隔たり又杵島郡の北のはしにも多良村ありなどあり。肥前國ノ人ノ云彼杵郡長崎より東方十里ニ藤津郡多良岳なり此山麓より巓まで三里あり山上ニ多良岳權現ノ社あり毎年九月十四日より十五日まで大祭ありて近郡ノ人多く詣づる處なり又此山ニ烽火臺あり長崎の烽火臺より多良岳次ニ筑前國竈門山と引つゞけてうつそ是秀嶺なるが故なり 此山ノ事柳園随筆にも聊見えたるを藤津郡ノ件の細注ニ引出せり考合そべし

○太良嶽權現社

肥陽古跡記ニ太良嶽權現者天竺摩訶陀國ノ大王之神霊也本地千手観音弥陀釈迦三身一躰之垂跡也和銅年中之草創也西方有山号ニ四面ノ尾ト是四面大菩薩常影向給之霊地也云云多良嶽上宮ノ地云ニ経嶽ト人倫不通之地也已来歴ニ九百七十

余年御縁起證文宝物等多有之之處大村氏一揆之時皆焼亡之云天正十三年之春金泉寺沙門発再興之大願僅造立一二之殿

○草菜観音堂 光蓮厳院

同書に鹿島草菜観音堂本尊者行基之御作也金剛山蓮厳院者白川法皇之勅願而開基者覚鑁上人也本尊者釈迦三尊鎮守者八幡大𦬇也 又云此寺境内に七不思議と云事ありて一ツは地形ひきくして水出る叓二ツは雀多く集まれども巣をかくる事なし三ツは池中の花皆佛殿の方に向てさくこと四ツは蛇居らず五ツは朝暮露のかゝりぬ處一間四面あり六ツは池に蛙居れどもなく事なし七ツに朝日さし夕日かゞやく日下に漆万貝朱万貝金千両ありし云されども今に至りて其ある所を知る事なし

○塩田川

風土記に藤津郡塩田川在郡北此川之源出郡西南託羅之峯東流入海潮満之時逆流漸細流勢太高因曰潮高満川今訛謂塩田川川原有淵深三許丈石壁嶮峻周迊如垣年魚多在東辺有温泉愈人病とあり塩田は志保多とよむべし柳園随筆に長崎に行ツには小田駅より塚崎を通らずして直に嬉野に出る是を塩田越と云此路をゆけば塩田川の側に迎て到る嬉野駅の南辺豊姫神社後の岸下塩田川の北岸に温泉あり湯勢甚熾なり駐人の病を愈せ春秋の比は隣國よりも来りて浴せる人多し風土記に有温泉とある

ハ是なるべし東辺と云るハ川の東辺にありし淵の東辺なり此湯西一里許に大路の南に淵あり周匝石壁にして水色藍如し風土記に川原有淵とあるハ是を云なるべし即塩田川の川上なりと見えたり 塩田村の事ハ次の件どもにくはしくいふを考ふべし

○塩田駅

延喜式に肥前國塩田駅あり。道中細見記に肥前國塩田駅あり嬉野よりハ三里東にあり塩田駅より東成瀬に二里あり塩田駅より東南加島に一里あり塩田より西多良駅に五里あり

○塩田郷

和名抄に藤津郡塩田 之保多 あり東鑑廿五巻に潮田六郎あり是ハ別に上にも引てしごとく風土記延喜式などにも見えて名高き處なるを今其郷の境堺事ハあしりに傳ハるぞされども塩田駅のありよりに他郷名も聞えねば其あたりは廣くさして云てしなるべし今の嬉野温泉の辺も必此郷の境内なるべし 重て元禄図を按るに塩田ハ塩田郷塩田村にて嬉野ハ嬉野郷嬉野村なれど別なり

○藤津

風土記に昔者日本武尊巡狩之時到於此津云云繫舩覧於

大藤因曰藤津郡とあり此津今は詳ならざれどおもひては
もし今の竹崎津すてもあらむか。地圖を按するに藤津郡内
よりて津とも云べき地はある事なし。道中細見記に竹崎
より海路佐嘉に十三里。寺井に十三里とあり

○彼杵郡

延喜式に肥前國彼杵郡あり。和名抄に肥前國彼杵曾乃岐
とあり。名義は風土記に昔者纏向日代宮御宇天皇誅滅球
磨贈於之時在豊前國宇佐海濱行宮勅陪従神代直遣此郡
速来村捕土蜘蛛於是有人名曰速来津姫此婦女申云妾弟
名曰健津三間住健村之里此人有美玉名曰石上神之木蓮
子玉愛而因藏不肯示他神代直尋覓之超而逃走落石岑郡以北之山
即遂及捕獲推問虚實健津三間云實有二色之玉一者
曰石上神木蓮子玉一者曰白珠雖比礪砆願以献之亦申云
有人曰名箟簗住川岸之村此人有美玉愛之因極定無服命
於茲神代直迫而捕獲問之箟簗云實有之以貢於御不敢愛
惜神代直捧此三色之玉還献於御于時天皇勅曰此國可謂
具足玉國今謂彼杵郡訛之也とあり。さて三代實録十三巻
に貞觀八年七月肥前國彼杵郡人永岡藤津云云。海東諸國
記肥前州彼杵郡彼杵遠江清原朝臣清男。鎮西要略三巻に
文和元年正月肥前國高来彼杵郡邑官軍蜂起管領道献使

小侯少輔七郎氏連追討〔氏連道剰之子大将〕など見えたり。郡の大様
ハ風土記に彼杵郡郷肆所〔里四〕駅貳所。和名鈔□巻に彼杵郡
大村。彼杵。〔風土記に郷肆所とある内二處ハ早く此比にゐえてつゝらざりしなるべし〕
寛知集に彼杵郡六十八村と云なとあり。方位の事東ハ高来
藤津杵島三郡にとなりて南ハ高来郡にとなり西ハ海を限
とし北ハ松浦杵島二郡にとなりて東西□□里南北□□里
なりあて土地廣けれどもし平田すくなし里民多く魚塩
を以産とす又郡西に長崎津有て蠻舶の往来年毎に絶ル事
なけれども富民多く諸國より入来る人多くして甚ゆたか
なり〔図に松島の大島あり長一里横十八町余又加喜島ありて長廿四町横十八町あり。和漢三才図會に肥前国長〕

嵜ハ當國西南隅異国海舶著岸津湊也往昔長門浦或平戸島
為湊元和年中以来限長崎一所繁昌地也未方至肥後天草
海上二十里亥方至平戸海上三十五里酉戌至五島四十六
里丑方至諫早七里至豊前小倉四十四里。長寄登壇必究二
十二巻〔日本国図〕に肥前州長岐あり岐ハ崎の誤かり圖面の在所も
長崎にてよくあしれて長寄ハ奈我佐支とよむべし名義
ハ長くさし出たる埼のありて負せたるべし登壇必究ハ
明の末につくりて秀吉公朝鮮征伐の事なと記せり。扶桑
紀勝五巻に初て肥前長崎を立ル事ハ天正八年なりと云又
云元亀年三月十五日大村理仙ガ家人友永對馬と云者
初て長崎の地割をせりと云大村氏の先祖長崎を領ぜし
時里民此處に耶蘓寺を建て長寄民家を司る夫よりして
耶蘓船入来たれり。長崎町中及唐人阿蘭陀等の粮一年に
八万石大小豆二万酒に醸せる米十万石すべて廿万石に
およぶ又異國より長崎に持来るその多き時ハ二万貫
目すくなき時ハ一万五六七千貫目あり其内半分ハ長崎
にて買ある物の直とられ故に是も此地にとゞまる事なり
日本の土産色々多く買て帰るから商賣のたえなり近来
を持来ある物の分量を公儀より減せられまて日本に買取
るそのすくなし寛文年中長寄町數内外六十五町竈數八

千六百八十六。家数三千六百十二。借家五千三百三十四。男
女三万八千二百六十四人男一万九千百二十八人女一万九
千百卅九人。町数凡八十町。戸数一万千六十五家。口数男女
五万二千七百二人橋数三十三。船数四百廿八艘。ありきて
此長崎ノ初ノ領主と云ハ長崎左馬大夫なり。其子も又左馬大
夫と云其子勘左衛門ニ至り相續て長崎を領そ則春徳山ニ
城を築て是ニ居る其後勘左衛門秀吉公の命ニ背きて長
嵜を追拂されて筑後ニ漂泊そ是ニ因て長崎ハ勘左衛門
が舅大村民部純忠入道理仙が領となる然所ニ元亀元年
初て此地ニ黒船入津して商賣そ。されも翌　年三月理仙
が家人友永對馬ニ命じて長崎の地割を定む是長崎を立
る初なり其後年々ニ町屋敷出来そ文禄の始より秀吉公
寺沢志摩ノ守ニ命じて長崎ノ地を撿察せしめて公領となし
給ふ長崎の惣町割ハ此時ニ成まり此比より耶蘇舟初て
長崎ニ来たりて耶蘇宗をたつ其後寛永の比より中華其
外諸蠻の商船長嵜ニ入る寺澤志摩守ハ東照権現の御代
となりて慶長七年ニ至るまで長嵜の奉行職をつとむ其
職ハ今ニ至れば耶蘇宗御禁制の初ハ慶長十六年ニ大久
保駿河ノ守を長嵜ニ下されて耶蘇宗門の寺悉破却して其
徒ハ残らず本國ニ返さる其後寛永三年ニ至て水野河内

守を長嵜ニつかはして耶蘇宗門のものを悉く改宗させ
命ニ背く者をば刑せらる同六年竹中采女正をつかはし
てなを耶蘇宗を改めざる者を悉く死刑ニ行ハる同十三
年までも南蠻人なを町家ニ住せしかども同年御禁制ニ
因て長崎の商人等力を合せて出島をつき南蠻人を此處
ニ置て交易そ長嵜港ハ左右の両山高く海水深くして入
海の長き事三里あり故ニ風波和ニして舶船覆溺の憂な
し誠ニ異船を繋ぐニ極めてよき處なり幸ニ日本の最西
裔ニあたりて異國ノ船の入来るニ海路の便よろしきまゝ異賊
の襲来をふせぐニもよろしき津なりかゝるめでたきこ
なとハ諸州ノ内ニもすくなかるべし。又同書ニ寛永十三年
南蠻人町家ニ居る事を戒め給ふ故ニ町人等出島をつき
て是を置く同十六年南蠻人の来る事をとゞめ給へて日
本ノ人他邦ニゆく事ハ寛永十一年ニ戒め給へり寛永十三
年の御定ニ長嵜の外唐船入津の事を戒め給へり。長嵜夜
話と云ものニ長崎古ハ大村ノ父島ノ城主の領なりしを豊臣
関白の時公領と改まりて長崎山里淵村の三庄を合せて
三千四百余石ヲて民口五万の喉を潤そニ乏しと云へども
華夷ノ船の商物二十万金のぞめきあれば家ハ四千餘て竈
ハ一万ニ及びて魚菜鳥獣唐土ノ菓菜蠻夷の珍菓口ニゆゝ

りに唐人の管絃耳をとましむ云云。元亀元年庚午年南蛮
の黒船一艘津外の西浦福田と云處に漂ひ来りて荷物
など賣買ある序に深江湊を見て是こそ世界の一の湊よ
と悦びて来年より此津に来るべしと約束して帰て
ぬ是に因て元亀二年三月に大村家臣友長氏に仰せて諸
国商人の旅宿なくてはとて地割有て高来大村平戸所々
の商人家宅を営ミ建る事五六町なりしが案の如く其年
の夏亜媽港より黒船二三艘数千貫目の商物を積来り
ぬ是より年ごとに絶ず五七艘又は十艘来らぬ年なし
此故に漸く人の住ミも数そひ町も多くなり行て今の如
くさかえぬ生土神は諏方大明神にて住吉熊野三座一社
に祭る凡て今社数四所・両部神社五所・寺数凡大小四十一
寺。尤繁栄せり。云云黒船停止の前より邪蘇教の正法にあ
らざる事など公の御いぶかりにて日本人みだりに異國へ
渡海なる事を寛永十二年に御停止仰出されぬ初御朱印
を給はりて長崎より年々異國へ乗りし舟五艘あり末
次氏二艘舟本氏一艘荒木氏一艘糸屋一艘是なり次に泉
州堺伊豫屋一艘京師船三艘は茶屋角倉伏見屋なり三處
舟合せて九艘の外他處よりは渡海なし何れも皆長崎に
て唐船造の大船に造りて皆長崎の津より出帆す此時によそ

大明にも往こしなし東京・交趾・塔伽沙古・呂宋・亜媽港・柬埔
寨・暹羅・等の国々へ往来せしなり唐土にて倭寇とて明朝
初より日本の船を甚禁制せし故に大内義隆よりの勘合
船の外にて彼海辺に至る事ならし云云とあれば長崎夜
話は享保の比に長崎西川正体と云者の造れる書なり今
その内をつミ出て引て委くはいかの書をひらき見てしる
べし。又同書に長崎物産。硝子。土圭細工。天文道具。真鍮細工。
珠数。石印彫刻。花毛氈。女利安。畦足袋。花莚。算盤。玉細工。珊瑚
珠。外科道具。唐風竹細工。唐船大工。石橋唐風石工。鬘紙。綿弓
弦。煙草。南瓜。西瓜。八升豆。シャボ。赤芋。琉球芋。唐菓子。南蠻菓
子。石火矢などあり。さて和漢三才圖會に肥前國菅原大明
神在兵撫村自諫早十里南祭神菅丞相ひうきべに川お
ちせしをとらるなりし川おちをのこ我も菅原。此辺多有水
獣而捕人渉河人書件歌於竹葉投川則水虎不為害云又長
嵜之辺有称渋江文大夫者能治水虎而嘗出箭渉河人携其
箭則不害矣或時有壮士等戯飛礫於海中若干也於是水虎
来干渋江家告曰従長崎官令黒田家西泊営向我棲投礫若
累日不止則為對彼家災害也因渋江訴上件趣人咸以為奇。
諏訪神社。古本九州軍記に天正七年五月肥前國長崎村住
人長嵜左馬大夫貞武が子長嵜勘左衛門と同所町内住人

高木高島の者共と合戦をなさん爰に諏訪大明神の社僧に
國円坊といふ悪僧あり甚左衛門が語らひによりて外方に
属しをいの馬場下小竹村にて己が人数を隠し置内町之
勢橋中を引取る時咄と起りて突懸るといへりといふ・近
世武家編年録に寛文四年肥前大村耶蘇宗徒発露凡六十
余人於長崎悉逢刑・承應三年七月六日僧隠元帰化于長崎
　元年五月廿四日恵計礼須船来于長崎七月下旬帰・西
遊記に長崎春徳寺の山上に東海氏の墓あり其廣大美麗
なる事日本第一と云べし其躰日本の墓の作りざまとは
大にことにして山の半服を穿て向ふは石垣の如くなし
こゝらげ中を平にして石の机あり石の門ありて石の宮あそ
四方の石垣もうるか石を彫りて種々の花鳥を細密になせり
つけあり石柱石門皆鳥獣草木を彫付或ハ文字を彫たり
其外色々の道具皆石にて作きり其構ハ廣く其細工精密
にして初て作り立たる時の費銀五十貫目入りしといふ其
後なるか心にかゝりあしば二三十年がほどハ常々石工をや
とひ墓を修めしとぞそれよりして長崎のころうずる手
間入て埒のあかざる事を東海の墓ぶしんといふ此人ハ
唐土より明の乱をさけて日本にのがれる人なり大福有
の人なり今に其子孫東海徳十郎と名のりて唐人の通事

なり又近き比まで京によりて明樂の師範せし鉅鹿氏の
先祖の墓も長崎の西山と云所にあり其制東海氏の墓の
如しされども大に劣れり石碑の如きものは明の故伯毓
禎魏公六府君故考雙侯魏公九府君墓道いくの如くなり
つらたり前の石階に浙瑞東南の四字を大字にほりたり
又其一段下に椿林鐘秀の四字大字を横に彫たり此墓小
なりといへども世上の墓にくらべてハ大国ノ君の墓所と
云しも及ぶ所にあらずぞ其外唐人の墓ハ大方大にして美
麗なりなどいふ
こともみしなり

○稲左神社

三代實録五巻に貞観三年八月廿四日肥前國正六位上稲
左神授従五位下・同書四十七巻に仁和元年二月十日授肥
前國従五位下稲左雄神従五位上とあり・稲左雄ハ伊奈佐
表とよむべし初に雄ノ字のなきハ落たるにや 御名の義稲左ハ地名に因

て負せしまりと聞ゆ〔その地名の本ハいかなる由にて負せけむしらしぞイナサと唱ふる處ハ出雲國又遠江國なとにもありて古き世のふることにもみえしあり又式に出雲國出雲郡因佐神社とりふとえしあり〕雄ハ男女二神などましませるにて負せつるべし〔とし二神ましませども男神にましませるに因て負せたるにても有べし〕さて肥陽古跡記下巻に稲佐山太平寺三所大明神ハ百濟國聖明太子尊靈而欽明天皇勅願也弘法大師入唐の時此山に来りのふに一人忽然と現て大師に向つて曰く我ハ此山の主也云云大師此山を再奥しのくと云云大師自尊影を作りて稲佐山下築切と云所に寺を立て御影を安置し空海の一字を残して海藏庵と号し三昧を行ひ給ひけり或時其辺の村に蟹出て田苗を切る民深く是を歎く大師加持しのふる蟹失せく夫より田を損ふ事なし抑此三所大明神ハ本地ハ阿弥陀如来観世音并不動明王也上宮ハ御岳七郎殿本地薬師如来也平城天皇の勅願として御衣田を寄附し給ふ正一位稲左三所大明神の尊号をおくりのふ御衣田にも蛙一ツもなき事たし不思議なりと云傳ふ大明神御来朝の時召ましまる御座船八艘を藏めて上に寺をたつ今の八艘坊と云是なり其碇一ツハ變して石と成てけり一ツハ化して忽松となる今の碇石碇松是なり御車を引し牛ハ石と成て今も御手洗川の末にあり神変不思儀の旧跡也毎月十九日祭礼を行

ふ社前より秡川假殿に御輿を下し流鏑馬秡種々あり御宝物にも横萩右大臣豊成公息女中将姫御筆の大般若経一部あり。筑前國志摩郡今津浦壽福禪寺古文書に法性國之御有持天神摩訶多國之大王天照大神渓誕國之御鎮守権現。権現者七歳之御時唐与日本塩之境五島而浄土會之観音と現じ賜ふ也従其平戸之郡康滿岳之主持之権現自其肥前之國後藤山之みしやう黒上法身権現是也それよりゐあさ大明神と現じ又其より龍王崎かりかめの島とふみ留于今彦島と申也龍王崎より舟に乗せ給ひ寺井之津よりあがり給ひ手水をつかはせ給ふ為に井を堀せ給により

于今寺井と申也従其千端之布をもつて金住山にかゝらせ給ふ處に中途にて布留り侯によりて中にて千段之布と書申也其より豊後豊前筑前三ヶ國之景山彦山三社之権現とあらはれ賜ふ彦山は二ッ殿天台山と現じ其より熊野拾二所権現と現じ其より天下第一大霊権現と現じ給也。娑婆世界南贍部州大日本國西海道筑前國志摩郡濱崎浦権現堂恒例修正人名帳之事一戸尻一枚為志行年之奉公なればやし富なれはかりぞひだりにのかんそより右三べん弘安三年正月とあり是は心得難き事ながら古き傳なればそこしは據もある事なるべし尚考ふべし又太平記三十三巻に筑後國大原合戦件に稲左治部

太輔と云ともしあり。青柳大人云肥前國彼杵郡に稲左村あり長崎の西の江を隔て高山あり是を稲佐岳と云人家は其東の麓にありさて人家の北の江に臨て九キ山あり其下に稲佐神社あり今は辨天の社と云此辺数村の産土神なり真言宗の坊舎一宇有て是を守ると云まうし 九州図に長崎の西にイナサあり又長寄ノ人は小長寄にと半里ばかり西に稲左村あり海辺にして漁人多くすめり

○神島神社

三代實録廿九巻に貞観十八年六月八日授肥前國正六位上神島神従五位下とあり。神島は加美志万とよむべし。御名の義は神のすむ島なるに因て神島とはいひやがてそれ島名を神に負せて神島神社と云へりと聞ゆ 神島と云はすべて国々に多き名なり式に備中國小田郡神島神社などもあり又九州図に松浦郡志式島の西に御神島といふもみえしあり さて其神島と云は孝徳天皇紀に四年七月被遣大唐使人高田根麻呂著於薩摩之曲竹島之門合船没死。唯有五人繋胸一板流遇竹島不知所計五人之中門部金採竹為筏泊神島とある是なるべし さうるを通證に泊神島とある處の注に神島は志登知・釈同・聖武紀に著等保知駕島色都島矣三代實録に云とあり此注さもうに聞ゆれどもし助けていはゞ神島は方言にシトチと唱へて則色都島と同じ島なりといふ意なるか。さらば此神島は近き島の内に有べきかとも思ひありしかどかのうちにさうる島名も聞えねばいかゞなり。又志式島の西なる御神島の事もしも思ひよりしかど薩摩より平戸までの間にそ多くの島々あちこちかりてあれを泊神島とある文勢はと物遠く聞ゆるなり 村名帳に彼杵郡深堀

卿之内硫黄島神島あり。青柳大人云彼杵郡稲佐岳の次南方入海にさし出たる沖の岩山を神崎といふ岬に岩窟有て神崎大明神ノ社あり（神功皇后を祭）其西南の海ノ中に孤ノ島あり高鉾と云（神功皇后の鉾を立給ひたる処なてといふ寶鉾のこゝろなるべし）其西に神島あり其側に傾宮島と云もあり又神島の東に皇后島あり何れも神功皇后の古蹟なりといふさもあるなれど。さてぞ新羅を征給ふをりにはあらずして其前筑後國山縣より南海に出て此辺をへて松浦縣にも行幸(イデマ)しめしゝなるべし風土記ノ趣を考ふれば景行天皇の巡狩(ミユキ)しめしたるも同じさるなり神島は長崎の入江にあり人家あり神社あり池ノ

御前といふはいかなる神なるにや。婦人産ノ事を祈るに必霊験ありと云是三代實録に挙(ゲ)たる神島ノ神なるべし（常足云神島は長崎ノ入江にあるを古書にのせたる物と定むるはいさゝか海路の筋も甚うとし薩摩の上コシキより長崎ノ入江に五十里あて其間は真の大洋にて島なども有ってなきところなれど先此所の神島に泊(ハテ)たりけむこともあるべし）

○堤雄神社

三代實録五巻に貞観三年八月廿四日肥前國正六位上堤雄神授従五位下。同書四十七巻に仁和元年二月十日授肥前國提雄神従五位上とあり堤雄は都々美乃表とよむべし。御名の義は堤乃ある處にませるに因て負せたるべし（又堤を造るに因て祭りたる神にてもあるべし式に河内國茨田郡堤根神社なども堤ノ事に因て祭まりと聞ゆ文徳實録二巻

に河内國堤津島女神ともいふもあり
雄はいまだ思ひえず若女男の二神ま
志ませしなどにて負せしゝるにても有むか。さて青柳大人
云彼杵郡稲佐村稲左神社より十七八町ほど北の山つゞ
きなる寺野郷村ありさて其里ノ西の谷ノ奥に堤と云地あり古
代に池塘の有し處なりとて堤ノ趾ところどころに残まり其上ノ山
に大岩そびえ立てあり其下に石祠あり立岩権現といふ祠
後ノ岩に窟あり里老傳いふ昔神功皇后三韓征伐のときめに
祭賜へる社なり依て其社を三韓のかたに向はせたりと
いふ今は北向なりいかさまにも古キ社と聞えたり三代實
録に堤ノ雄神とあるは是ならむか同書に稲佐ノ神堤雄神と

連ね峯ガあれど大かた違ふましくなむ 常足按るに松浦古来略傳記に横田
八幡宮横田村八神寄郡にあり社領二百五十石。社頭堤大
和守下社家云云とあり此堤氏をし堤ノ神に由ある事には
あらぬにやなかなかまくらむといふべし。重て按ずるに堤は健ノ
誤まく多祁哀と訓むべし今も嬉野村に健雄ノ神社とてあ
る古き社なり

○千松寺

古文書に奉寄進東寺肥前國彼杵庄由宇村内千松寺事右
寺者當村地頭兵庫助平幸純先祖草創之寺院也云云元弘
三年三月廿一日とあり此文書は洛東の東寺にあり

○浮穴（ウキアナ）郷

風土記に彼杵郡浮穴郷在郡北纏向日代宮御宇天皇在宇佐

濱行宮詔神代直曰朕麻巡諸國既至平治未被朕治有異徒
手神代直奏云煙波之起村未猶被治即勅直遣此村有土蜘
蛛名曰浮穴沫媛捍皇命甚無礼即誅之曰浮穴郷とあり東鑑
十八巻元久二年浮穴ノ大夫高茂とありも筑紫の人なるべくおもへりける浮穴は宇支安那とよ
むべし安寧天皇紀に二年遷都於片塩是謂浮孔宮ともいへり和名抄に伊豫國浮穴は宇城安奈なりしも見えたり又續
後紀に伊豫国ノ人浮穴ノ直千継と云も見えたりさて此浮穴は沫の枕詞に置たる
物と聞ゆこれぞウキアナノアワヒメとのごとそらへてよむべきかなりか考ふべし其枕詞を
やがて地名に移せるなり誅之とある下に落字あるべしさて此浮穴郷
今はさだかならねど風土記に彼杵郡郷肆所とあげて
浮穴周賀の二郷のことをあげ和名抄に大村彼杵の二郷の
ことを挙たるに因て思へば肆所の内二郷は和名抄に出せ
ると同事にて郡中を四ツに別ちて南方を浮穴郷とし西方
を周賀郷とし北方を大村郷とし東方を彼杵郷としたる
物と聞ゆされば浮穴郷も今の長崎より西南野母肥御崎
桃島辺までかけていふ名なるべし九品図にこれを野母ノ辺は郡の西にあ
たれて今は日本輿地図に因て郡ノ南とさだむ日本道中行程細見記を按ずるに
長崎より東南に至る事二里にしてアバと云處あり是よ
て嶋原の小濱と云處に海上八里の渡りあり此アバと云も
正しくはアワの沫媛に由ありて負せつりと聞ゆ。なほ委しくた
づねてぞ此外にも沫媛の故事など語傳へつる處もあるべく

し

○周賀郷

風土記ニ彼杵郡周賀郷在郡西南昔者息長足姫尊欲征伐新羅行幸之時御船繋此郷東北之海艫舳之牂戒化而為礒牂戒ハ牂柯の誤り前漢書地理志ニ牂柯ハ繋船杙とあり委しくハ此巻の一丁杵島郡の細注ニしいへり高二丈餘周十餘丈相去十餘町充而嵯峨草木不生加以陪従之船遭風漂波於茲有土蜘蛛名欝比表麻呂拯済其船因名曰救郷今謂周賀郷訛之也とあり周賀ハ須可とよむべし和名抄ニ伊勢国壹志郡須可と云もあり又太平記ニ須賀壹岐守といふもみえたりさて柳園随筆ニ彼杵郡松島迫門を出て長崎ニ至る洋中を相撲灘と云神島まで十里あり其沖のかたニ十餘丈の大岩二ッ海中ニ立てあり是を沖ノ相撲地ノ相撲と云其状甚奇なり沖ノ方なるハ大洞ありて見えたり南北相對して屹立せる状猛勇の力を争ふ勢ニ似たり因て俗ニ相撲石といふ此巌の辺海の深さ三十尋あまりといふ此地ノ方ハ雪ノ浦幸ノ浦などあり風土記ニ周賀ノ郷ハ此辺の事なるべし幸ノ浦と云も由ありげニ聞ゆ神功皇后の牂柯化して石と成たりと云ハ此相撲石事なるべし郡ノ西南とあるもよくかなへり常足云地図を按るに松島ノ辺ニ小島多し松島ニ人家あり此辺大村領なり神楽島相撲島引島母島などハ松島ノ南ニあり池島ト、ク島ハ西ニあり妹脊島キト島ハ遠く西北ノ隅ニあり大島椈島ハ北ニあり松島より東ノ陸ノ方ニ雪ノ浦小迫门七釜と南より北ニつらなれて夫より北ニ冬切・面高等あり・道中行程細見

記にそ日本相撲唐相撲と記せりなりかこのころりの事速来門の件にもいさゝかいへるを考合すべし

○速来門

風土記ニ彼杵郡速来門（在郡西南）此門之潮々来者東潮落者西涌登涌降響同雷音因曰速来門（流布本に連来門とあるは誤なり今青柳大人の考に因て速に改む）又有松木本者著地末者沈海海藻早生擬貢上まゝ（彼木郡件）纏向日代宮御宇天皇云云勅陪従神代直遣此郡速来村捕土蜘蛛於是有人名曰速来津姫此婦女申云云とあて速来は波也支とよむべし（後世にハイキと唱ふるは年人をハイト早鷹をハイタカなど唱ふる例にして音便なり）圖書編五十巻日本國序に肥前國法一溪（ハイキ）あり地圖を按ずるに北なるを早岐の迫門といふ早岐は北に在て向ひに右福村あり此間則迫門なり南なるを針尾迫門といふ針尾村は北に在る島なり向に河内浦あり其間則迫門なり瀬戸村松島との間に焼島と云島あり松島よりはちひさし圖に瀬ヶ尾嶌は長崎の南の沖にあり長十八町横五町ばかり香焼島長一里横十町イワウ島長十五町横五町右の三島はいづれも相近し是より少しさかきて西方に鷹島とてあり長十町横八丁柳園随筆に速来今は早岐と書て平戸侯の領なり漁家多し門は今は針尾迫門といふ此入海は即彼杵郡より長崎に通ふ道筋にして時津渡の海口なり其海口に針尾とて大なる島有て海

潮を堰かるが如し其島の南北則瀬戸となりて潮汐左右
より進退なて其門甚狭し故潮怒激して其音冷し島東南よ
人家あり鯛浦と云此入海の両岸に浦々多し南東ハ早岐
次に久ク津ヅ浦是より大村領此浦にアコヤ貝を捕て真珠をとる此
入海の浦々に真珠を取るその多し珠ハ極品なりと云此貝
王の多きハ一ッの内に真珠三ッも四ッもあり凡貝毎に珠あり
他國にも此貝あれど此處かるにもあらんは海中の和ナギかる
時に船より此貝を見ときて殻を開きて真珠を吐出し自是
を弄して止でだと云風土記にと此郡美王の多かりし由見
えかるハ誠に珠によろしき處になむ次に小串浦此浦の

南崎を大山嵜と云遠方よりて望めむ松山三峯有りて海に指
出かり此向ひを霧嵜と云此间一里半ならりあり其次ハ川棚
其次ハ彼杵駅なり是より時津に七里あり是入海のいと廣キ處な
て是より長嵜に陸三里より速来より東に入て三里の间
迫門なり其狭き處ハ乃づうに廿间に過ぎと見えかり彼杵
ハ北時津ハ南にありて其间の海恰も湖水の如しといふ。
さて上にも云へりしごと此らのまの海辺すべて面白き
所多し此迫門を西に出て西南にいりきぎ長嵜に至る道
筋の島々浦々の事ども聊いさゝか海路記に神樂島の地方
にシキミ嶋刈と云所あり间白濱を舞濱と云上古にもシ
キミ・アゼカリ西浦の男女此濱に出て神樂をなしより夫よ
り沖島を神樂島といふ此島に鷹の巣くふ事ありと云。相
撲石ハ沖相撲地相撲とて二ッあり地相撲ハ高さ凡二十间
も有るべし巡りも同じ地相撲のいたゞきに大木の榁柑あ
て熟して落る時にぞ榁柑といふる。池島ハ相撲石より

西ノ沖にあり廻リ一里にあまりし島ノ峯に池あり深さ七尋・長さ
百八十間・横百二十間・水ハそこしらいゆへ白えび・しか
ぎるほど多くぞあり・瀬戸ハ沖に松島あり春ハ鯨つき居る
前ノ松山を天下島と云本名ハ焼島といふ是を天下島と云
事ハ往者瀬戸ノ浦に冨者あり近キ浦近郷より敬ふ事かぎり
なかりしがいかなる故にや彼者狂人と成て此島に渡り
我近きうちに天下ノ主となるべしとて云云此島にて空し
くなりたれど天下島と云と云て三年が浦崛曲自然にし
て五町などの入海なり往昔此おくに唐船三年が間かく
れ居て知ル人なかりし由夫より三年がうらと云同じなり
びに唐人が水とてあり彼隠居たる舟此所より水を取た
る由にて俗にタウジガミヅと云水のうるはしき処なり少
の風にも舟がいてもよろし・七ツ釜にても深き入海にて地
景勝よろしく冬霧ありても殊なる事なし・西高ハ人家の前に
入て無雙の湊なり古城ノ跡あり城主ハしれぞ・なにとえしる
て日本汐路ノ記と云そのに午が首より冬切ヘ三里・沖に黒島
と云島あり下もどわし梶に見る冬切にのる時ハ此瀬を
取梶にうく通る高く乗ル時ハ何風にてもよし冬切ノ迫門ノ脇
の取梶に瀬有リ・但冬切の山に付て通る下の口にひろき瀬
一ツあり此瀬を面梶にして通る取梶の下の口に一町四方

なれどの瀬あり冬切ノ迫門を出てそこし面梶に付て乗るな
て冬切より瀬戸ヘ五里・冬切より七ツ釜ヘ二里・此入口ふし
内に入て面梶の山に付てかゝる沖に甲島あり此島を面
梶にみて通る地より半里計ありて七ツ釜より瀬戸ヘ三里日
並より時ハ松島れ迫門を通る此瀬戸の内にひろきぜ二ツ
あり一ツハ乗かゝりての上の口なり一ツハ一町ほど下の口な
て但上ノ口の瀬ハ下リ面梶に見て通る下ノ口の瀬ハ下リ梶にみ
る松島と迫門の間一町ほど有り同所の迫門をのる時ハ
入口に高き尾嵜有り是をめぐりて尾嵜の脇に海込に瀬
あり尾崎と迫門の間十町ほどあり大船ハ瀬より沖をのり
小舟ハ取梶の山に付てのる尾嵜の脇に飯桶と云泊リ有リ入
て面梶に高き瀬ありて取梶に付て入る西風北風あたし風
北東までもよし南風そこしあらる瀬戸の入口海浅し面
梶に付て入る舟がりそれて口に面梶に付て乗るなり出
もぞ取梶の脇に家村あり出口取梶の方に高き瀬あり是
を嫌いてもよし舟ハ面梶に付てのる瀬戸より雪ノ浦ヘ三
里沖に島あり南の方に相撲島とて島二ツ東西にあり中に
行事島と云島あり地より一里ほどあり・雪ノ浦より見江ヘ
四里雪ノ浦と黒嵜との間におい瀬と云瀬あり此瀬を嫌ひて
沖を乗る黒崎ハ汐がいつもあり雪ノ浦より一里あり黒崎よ

て見江へ乘かゝるに瀬あり風によりて地を乘ども汐かゝりて大
舟は通らず此故に沖をあかりけてのる見江泊は汐かゝりて
もかゝりなり口に桂島といふあり此島も汐かゝりてなり桂
島の沖にひらき瀬あり地より通る夜は沖を通る・見江よ
り福田へ三里・泊りは西風北風あらし風北東までもよし東
風はあらる入口にちいさき瀬ありて瀬より地ノ方をも通る
福田より長崎へ三里・此間に大迫門小迫門あり小瀬戸は
汐によりて通る入口に瀬ありて下りおもて梶に持て通る泊りの
山に小島あり此島に付てひらき瀬あり此瀬は下きを面
梶に見て取梶の山に付て通る大瀬戸をのる時は沖に小
島あり又地にも高鉾といふ小島あり二ツの島の間を通りて
高鉾のうしろ迄廻りて長崎へのるなり面梶のかゝるに凡き
島あり取梶に付きて長崎へいる長崎ノ入口に高崎と云尾
崎ありさき入口なり爰より長崎へ一里入るを面梶にと
まちと云泊あり何風に
てもよしと見えたり

国立公文書館
National Archives of Japan